

保育のヒント～「科学する心」を育てる～

「科学する心」を捉えるⅡ / 出雲市立四絡幼稚園（島根県）

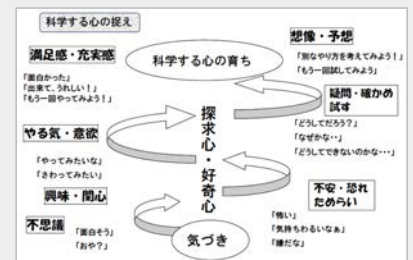
「科学する心」が育まれる子どもたちの姿は、日常生活や遊びの様々な場面で見取ることができます。その姿を、保育者が意識することで、子どもたちの体験を捉え、子どもに寄り添った保育の工夫を図る実践に結び付きます。今回は、「科学する心」の育ちについて園全体で考え方を共有することにより、子どもの姿から主題に迫る体験を明らかにする試みをしている実践を紹介いたします。



● メダカを守れ！ / 5歳児

✦ 「科学する心」について考える

幼児は身近なものに「何かな？」「触ってみたい」「面白そう」という思いをもち、手で触ったり、全身で感じたりして、繰り返し遊ぶ。そして、思ったことをやってみることで、考えながらものに関わるようになっていく。こうして繰り返し関わることにより、ものの特性を知ったり、関わり方が分ったりしていく。また、幼児はどうすれば面白くなるのか分からないものにも自分から関わっていきこうとする。その関わりの中で、不思議に思い探索したり、試行錯誤を重ねることでもの法則性を見付けたりしていく。このように、幼児が好奇心を抱いたものに対してより深く興味を抱き、探索していく過程を「科学する心」の育ちと捉える。



科学する心の捉え（図をクリックで拡大）

幼児が「何かな？」「触ってみたい」と自分から遊び出したくなるよう、園庭・花壇・「いきものにここ池」などの自然環境や物的環境等の見直しを図る。そして、幼児一人一人の「～したい」という思いを読み取り、幼児の思いが実現できるようにものや人と繋いでいくなどの保育者の援助のあり方を探り、幼児の「科学する心」を育てていく保育について追究していきたいと考える。

✦ 事例「メダカを守れ！～いきものにここ池の生き物育て～」 / 5歳児

「4歳児へ伝える～いきものにここ池を大切にしたい～」（昨年度の様子） / 昨年度5歳児

子どもたちが身近な環境に目を向け、自分から関わって欲しいという保育者の願いから、保護者や地域に呼びかけ、協力を得て、園庭にあるビオトープ池の再生に取り組んだ。5歳児の子どもたちは、新たに作ったビオトープを「いきものにここ池」と名付け、近くの川で捕ったメダカを持ち帰り、育てる活動に取り組んだ。取組みの中で、鳥がメダカを狙ってビオトープ池にくるようになると、子どもたちはメダカを守る対策を考えるようになった。3学期の終わり、大事に育ててきた「いきものにここ池」のメダカたちを、4月から5歳児組に進級する子どもたちにも大切に育ててほしいと、「お別れの会」の折、手紙を書いて「大切にしてくね」と伝えた。



● 4月当初

- 子どもたちは、よく見る・変化に気づく・「何故？」と確かめようとする姿が見られるようになってきた。保育者が想像していなかったトラブルに出合い、子どもたちと共に保育者も「なぜ？」と考えた。試してみないと良いのか悪いのか分からないという経験は、子どもたちの探求心を高めた。

読み取り・保育の工夫

5歳児組の子どもたちの生き物への関心が途切れたりしないようにと願い、昨年度の年長児からもらった手紙を保育室に掲示したり、子どもたちと書かれてある内容を読み返す場をもつ。

- 晴天が続き、池の水が少なくなっていると気づいた子どもたちが、水量を気にして水を増やすようになる。

● 4月下旬

- 4歳児の祖父より、「一緒に泳がせてください」と4種類のメダカを約200匹頂く。ヒカリメダカ（背中に光る筋）・楊貴妃（赤色）・シロメダカ（白色）・アオメダカ（少し黒っぽい）を池に子どもたちと放流する。メダカは大きな群れをなして泳ぎ始め、「すごい！」と見入る。 **気づき**

● 5月上旬

- カラスが「いきものにこここ池」に近付いてくるようになる。

保育の工夫

保育者は、カラスが池に頭を付けているのに気づき、子どもたちに知らせる。

- 子どもたちは、「エッー！！」と、ビックリして大声をあげる。カラスが頭をあげて、口から水が流れ落ちているのを見つめる。 **発見**

「カラスが、メダカを食べてる！！」 **驚き**

「大変だぁー」「どうする！？」 **戸惑い**

「どうしたぁー??」 **不安**

- 子どもたちも保育者も大きく動揺する。

保育の工夫

話し合う場を設ける。

- 子どもたちは、メダカをカラスから守ろうと考え、話し合う。

子ども：「去年の年長さん、キラキラする物付けてたよ」 **想起する**

子ども：「カラスが嫌いなキラキラする物付けよう」 **提案**

子ども：「キラキラする物が、本当に嫌いなのかな？」 **疑問**

- みんなで話し合う中で、どっちなのかが分らなくなってくる。

子ども：「去年水辺の生き物について教えてもらったゴビウス[※]の先生に聞いてみようよ」 **提案**

子どもたち：「いいね、そうしよう」と、意見がまとまる。

保育の工夫

「どんなことを聞いてみる？」と、質問を考える場面をつくり、疑問に気づけるようにする。



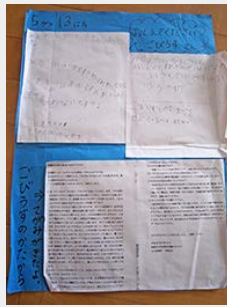
※ゴビウス
[島根県立 宍道湖自然館ゴビウス](#)

● 5月中旬

- ゴビウスへ、子どもたちが考えた質問をファックスで送る。子どもたちは、どんな返事が返ってくるのかと楽しみに待つ。
- 夕方、ゴビウスから回答のファックスが届く。

保育の工夫

翌日、5歳児の子どもたちにゴビウスから届いた手紙を紹介し、質問の回答を伝えて課題の共有を図る。



子どもたちの質問

めだかのいのちがねらわれています。
めだかがからすにねらわれています。
なにか からすをおいはらうほうほうはないですか？
からすのきれいなものは？
ほんとうにからすはきらきらがきれいですか？
めだかのえさはなんですか？
いきものみずはすいどうですか？
こおりむしのたまごをせおっているのは、おす めす？
どじょうのかいかたをおしえてください。

- 子どもたち：「池の上を網で張ってみようよ。一番いいんだよね。」 **予想**
ゴビウスの手紙を読み、カラス除けの網を張ることに決める。
- 子どもたちと網を準備し、池の上に網を張るが、昼頃 網が緩んで池の水面に落ちているのに気づく。
子ども：「先生、メダカが網に引っ掛かっているよ！」 **気づく**
子ども：「メダカ、大丈夫!？」 **確かめ**

保育の工夫

急いで落ちた網を取り除き、子どもたちと一緒に、失敗した原因を話し合い次の手立てを考える。

- 子ども：「もう一度、新しいキラキラテープを張ってみようよ」 **提案**
子どもたちも、カラスがくると大変と考えると、「いいよ」と応じる。 **予想**



✦ 考察

子どもたちは、よく見る・変化に気づく・「何故？」と確かめようとする姿が見られるようになってきた。保育者が想像していなかったトラブルに出会い、子どもたちと共に保育者も「なぜ？」と考えた。試してみないと良いのか悪いのか分からないという経験は、子どもたちの探求心を高めた。

無断転載を禁ず。引用する場合は右記を必ず明記願います。「(C)公益財団法人 ソニー教育財団 ソニー幼児教育支援プログラム 幼児教育保育実践サイト <http://www.sony-ef.or.jp/sef/preschool/>」